

第二部

7

ヒガシ探偵が横浜の寿町から山谷の池谷荘の事務所に戻って来た頃は、もう午後七時を過ぎていて真っ暗だった。かつての「野鳥の声」の活動家Iさんからは特別興味深い話を聞くことはなかった。それは釜ヶ崎のYさんからも同様だった。とはいえ、収穫がないわけではなかった。ヒガシは机の上にノートを広げた。そして、客用にいる中古の椅子に座ってメモをした。

——①予想はしていたが、「野鳥の声」は反原発運動のグループで目立つ存在だった。原発労働者の手配をシノギにするヤクザと思われる組員とぶつかることもあり、身の危険を感じることもあった。②無法松の役目は、鳴り物の太鼓を叩いて仲間を鼓舞することだった。しかし、本来血の気の多い男が実力行動をとらなかったといえるのか？ ③彼は当時から「無法松」という名で通っていた。④十数年たった今、当時のことが原因で襲われるなんてことが果たしてあるのだろうか？ あるのならそれは何だ？

ヒガシは、今度は自分用の籐椅子に座って、といっても拾ってきた物で一方が傾く代物だが、冷蔵庫から出した缶チューハイを開けた。

「あれっ、留守電か」

電話の赤いランプが点滅していた。メモをすることに気をとられていたため気がつかなかったようだ。ヒガシは一口チューハイを喉に流し込んだあと再生ボタンを押した。

「ヒガシ探偵事務所ですか？ 私は、Aさんから、あの、聞きまして、紹介されましたTという者です」。しどろもどろで話す女の声だった。ただし、そんなに若くはない。

「——実は、うちの娘がいなくなつて。もう三日です。帰ってこないんです。それでAさんから聞きまして、ヒガシさんに探してもらいたくて電話しました。また電話します。うちの電話は……です」と言っただけで女の電話は切れた。

以前、やはり家出した高校生の息子の捜索を頼まれて、ヒガシが無事探し出したことがあった。Aさんはその時の母親だった。まだ本格的に探偵稼業をやっていないで事務所も構えていなかったが、元巡査部長の警官ということで知人のついで話が舞い込んできた。これは知人からあとで聞いて知ったことだったが、「巡査部長という肩書がものを言ったんだよねにせ部長さんだから」「警部なんかより巡査部長のほうがえらい！」といって二人で大笑いした。

原因は、ふだんからの父親との確執だった。それが受験で爆発した。父親の考える大学へ入るには息子の学力は及ばない。父親の上から目線に対して息子は反発する。それが衝突したのだった。

ヒガシは実際に行動を移す前に、Aさんに言った。

「行方不明は早く見つけることが第一です。長びくとまずいですよ。そうしないためには、一にも二にも情報です。友人関係、それに家庭の事情などは言いづらいかもしれませんが、

できるだけ教えてください。本人が残したノートやメモのようなものも手掛かりになりまし、女性も含めた友達や親戚の住所と連絡先リストは特に必要です。あと、息子さんは当てはまらないかもしれませんが、タチの悪い暴走族なんかとの関係の有無ですね、そこが絡むと長びくことがあります」

ヒガシ探偵は、捜査を始めて五日目、早くもなければ遅くもない日数で高校生のO君を見つけた。

衝動的に家出した最初の日、O君はゲームセンターや深夜営業のマクドナルドで過ごした。次の日は新宿の雑踏をあてもなくフラフラと歩き続け、腹がすいたらコンビニでパンを買って公園で食べた。マクドナルドでのもう一泊は、警察に通報される恐れがあると思った友達にSOSの電話をした。その親には、受験勉強の特訓をするということで一泊させてもらった。次の日の朝、学校に行く友を尻目に彼は街に向かった。さらに両親が共稼ぎの友達の家に二泊したが、それが限界だった。ずっと一日が長く感じられた。そうして家出から五日目の朝、O君が友人宅を出るところでヒガシが彼に声をかけた。ヒガシにとって織り込み済みのパターンだった。

「O君、もういいんじゃないの。お母さんは心配してるし、お父さんだって反省してるかもしれない。家に帰るときだよ」

高校生はヒガシに促されて素直に帰り支度をした。すこし安堵の表情が見えた。若者の家出は行動範囲が狭いので、比較的短期間で見つけることができる。ただ、ヤクザ・暴力団やその類いとの関係があるところと面倒になってくる。今回の案件は、若い娘さんだ。そんなことでなければいいが……。

ヒガシは腕時計を見た。「まだ七時半だな」とつぶやいて、Tさんのところに電話をかけた。日給一万五千円プラス経費の久しぶりの探偵稼業である。

「もしもし、Tさんのお宅ですか。わたし、ヒガシ探偵事務所の者ですが……」。ちよつと格好をつけた声だった。

「松はやせちゃってよ、このままじゃあ、あといく日もつか。入院しろって言ったんだけど、病院なんて二度と行くなって嫌がってんのよ」

そんな赤シャツの言葉を聞いた熊さんが彼のアパートを訪ねた。ガリガリにやせて青い顔の無法松が熊さんのほうをじっと見つめた。椅子に座っていたが、布団が横に敷いてある。

「熊さんかい。よく来てくれたねえ」。弱々しくかすれた声だった。

「よう、元気そうじゃねえか。なんかほしいものはねえか?」

「酒、チューハイが吞みてえよ。もつ焼きも食いてえけど、もう喉に通らねえや。熊さん、チューハイ買ってきてくれよ」。さきほどよりもいくぶんかはっきりした声だった。

「わかったよ。酒が吞めるんなら、まだ大丈夫だあ」

「味がわからんから、『大利根』みたいに強いやつな」

「そんなの呑んだら体に悪いぞ。ここは薄いので我慢しろや」

そんなやり取りをした三日後、熊さんが再び彼のアパートに行くと、無法松は布団の中だった。

「大丈夫かい？」

「大丈夫といえ、大丈夫なんだが、駄目と言えもう駄目さ。もう体がきかねえけど、もう一度太鼓を叩きたいよ」。松の様子は三日前とは違っていた。

「俺も無法松の乱れ太鼓を聴きたいよ」

「無法松君の支援およびモガキの暴力を許さない会」は、三回目から「無法松君事件を糾明する会」に発展解消、最近では週一回のペースで開いている。ということは、呑み会のペースが速まっていると言い換えてもよい。まだ集合時間にはなっていないためメンバーは揃っていない。ところが、酒が呑める期待からか八つぁんと熊さんの姿がすでに見える。

「今日はすこし暖かいから、外に花見としゃれようじゃないか。家で酒ばかり呑んでたっていい考えは浮かばないぞ」。ご隠居のこの言葉に八つぁんは不満そうだ。

「ご隠居、まだ二月の末ですよ。外は体に悪いんじゃないですか」

「なーに、若い頃のわしたちホーボーにとって野宿は当たり前だったんだぞ。これくらいの寒さなんてどってことない」

「えっ、昔、ご隠居はアオカン（野宿）をずっとしてたんですかあ？」。驚いたのか感心したのか熊さんの声が高くなった。

「昔の趣味なんだってさ。でもご隠居、桜が咲くのはまだ先ですよ」

「八つぁん、花は桜ばかりじゃないぞ、梅じゃよ。梅はいいぞ。寒さの中で、ポツポツと咲いてな。『梅の花、一輪咲いても梅は梅』。これは新選組の土方歳三の句だけだな。季語が三つも入ってる下手くその見本って言われもするけど、わしは好きだな。孤高というのもあるが、どこかやけっぱちなところが感じられていいんだよ」

「やけっぱちねえ。で、梅の花見ですか？」

「ところで八つぁん、桜の花と梅の花の区別はわかるかい？」

「両方とも花ですねえ。梅は二月に咲いて、桜は四月の初めかなあ」

「実のところ、わしも知らなかったんだが、調べたら花びらの先に切れ込みがあるのが桜、先が丸っこいのが梅の花だというんだな。それで実際見たら確かにそうだったよ。それに桜の花はバラバラ散っていくけれど、梅の花は枝に付いたまま朽ちて縮んでいく」

「ふーん、年寄り向きの花なんだ」

「こら、そこで変に感心するな。あと木の枝に光沢があるのが桜で、梅は肌がごつごつしてるから、これは区別しやすい」

「桜はやっぱ桜餅ですねえ、梅は梅干しかなあ、梅酒なんてのもあるか……」

「そういえば、二、三年前に八つぁんが持ってきた梅の実で梅酒を作ったことがあったな。なかなか旨い酒ができた」

「なってる実を誰もとらないから、もぎ取ってきたんですけどね。人目もあるし、コソ泥み

たいな気分でしたよ」

「そいつは悪かったな」

「ご隠居、風が出てきましたよ。こりゃ寒くなるから、外はよしたほうがいいですよ」。熊さんがくすりと笑った。

それから一週間のあと、無法松が死んだ。もう少しもつのでは、という熊さんの見立てを裏切って、あっさりと死んでしまった。ただ、苦しんだ様子はなかったという。

無法松は多くの山谷の日雇い労働者と同じく独り者だ。しかも近くに身寄りはいない。そこで、無法松の生活保護を取った関係で池谷荘の組合のオカさんが秋田の親戚に連絡をとることになった。電話に出たのはお姉さんだった。オカさんは無法松が「事故」で亡くなったことを話した。そして、葬儀はまだ決めてませんが、とやりわり切り出した。

お姉さんは困惑した口調で、「うちには普通の葬儀をしてやる余裕はありません」とすまなさそうに言った。オカさんが「大丈夫ですよ、葬儀は仲間に出します。それに、役所の援助もありますから」と告げた。お姉さんは、葬儀には何とか出たいので日にちと場所が決まったら教えてくださいと言っていたが、次の日、組合に「出ることができなくなりました」という電話があった。何度も「すいません」を繰り返していた。

「うちは労働争議には慣れているが、葬儀はなあ」と言いながらオカさんは、熊さん、赤シヤツなどと少人数で葬儀を行った。遺骨はしばらく熊さんがあずかることになった。

後日、「無法松君、お別れの会」がご隠居の家で行われた。日雇い仲間が各自酒を持ち寄り、ご隠居の手作りの料理を着に、まるで何かのお祝いのようなどんちゃん騒ぎとなった。どこから持ってきたのか太鼓を叩き、歌い、呑んだ。もちろん、ヒガシ探偵、タカハシ記者も参加した。日雇いは朝が早いいため夜八時で強制ストップとなったが、それは昼間の三時から五時間も続いた。次の日、ご隠居は隣近所をまわって、その騒音の謝罪をする羽目になった。

マンモス交番の前で、ごつい日雇い労働者と警官が言い合っている。坊主頭にねじり鉢巻きをしたその男は酔いがまわっているのか、舌が少々もつれている。

「松をやったモガキ二人組を捕まえたのかよ」

「そんなこと、お前に言う必要があるのか？」

「まだ捕まえてねえな。こんなところでブラブラしてねえで、さっさとしろや。あんたらは日雇い一人が死んだってどうってことねえかもしれねえけどな。そうか、モガキなんか捕まえたって点数があらんか」

「お前、酔ってるな。これ以上ゴタゴタ言うとなら箱にぶち込むぞ。それとも公務執行で逮捕されたいか。だいたい、モガキにやられた奴も金を持って道で寝てるからいけないんだよ」そこで一人の労働者が割って入ってきた。「おい、やめとけ、これ以上やるとブタ箱にぶち込まれちゃうぞ」と言って、坊主頭を引っ張っていった。

ここは大利根。八つぁんと熊さん、それにタカハシ記者とご隠居の四人が神妙な顔をしている。ヒガシ探偵は本業の家出人探しで欠席だった。ご隠居は風邪気味なので八つぁんから自重するように言われたが、それに反発するかのように強行出席していた。

「おい、みんな、無法松に献杯だあ!」といって八つぁんがチューハイのジョッキを高く上げた。

「無法松の下手くそな太鼓にも献杯!」。向こうのほうから労働者の声がした。

「もう遠出の野鳥の会は無理だけど、せめてもう一度花見くらいは行かせてあげたかったな」と熊さんがぼそと言った。

「もうすぐ春だっていうのになあ」

「でも俺は夏に死ぬのはいやだなあ」と熊さん。

「暑いからか。でも冬の今は寒いぞ」

「夏の朝、歩いていると道にアブラゼミがひっくり返ってるんだよ、腹をみせて。どうも自分で向きを変えられないようなんだ。しっかりしろって起こしてやるんだけど、もう飛べない。で、近くの木に止まらせようとしても駄目、木につかまる力もないんだ」

「どなたか知りませんが、ご親切にありがとうございます。でも、あつしはもういいけませんって顔してたのか?」と八つぁん。熊さんが黙ってうなずく。

「幼虫だった長い地中の生活から外に出てきたら、すぐに死んじゃうんだからかわいそうですね。で、熊さんは夏が嫌い?」とタカハシ。

「あとミミズもやるせないぞ。夏に道を見ると、これは舗装された道なんだけれど、干からびたミミズがけっこう死んでるのよ。ミミズとしては『今日は暑いから外に出て涼もうか、外には見知らぬ敵がいるかもしれないけれど、こう暑くちややってられないもん』なんて決心して、土の中からはい出てきたんだな。それで『やれやれ敵はいなかったか、涼んだからもう土の中に帰ろう』なんて思ってたんだから。それでアウトだな。悲劇なんてもんじゃないよ」。八つぁんは調子に乗っていた。

「これは本当に悲惨な話よ」と、今度はタカハシが話し始めた。イギリスの最下層の街イーストエンドについてだった。「産業革命の下、世界は前に進む姿を見せ始めたはずでした。でも……」

八つぁんと熊さんはちよつと緊張気味だ。

「ロンドンのイーストエンドの住民は、何はなくても埋葬費を常に用意しておかなければならなかった。何しろ子どもがどんどん死んでいくから。七人産んでも六人が死ぬ。そこで、週に一ペニーを集金埋葬協会の集金人に渡していたの。集金埋葬協会なんていうのがあったのよ。当時、中産階級が主に住んでいたウエストエンドでの平均寿命が五十五歳だったけど、イーストエンドでは三十歳だった。黄麻工場や白鉛工場などで働き続ける子どもたちの多くはその三十歳どころか、二十前後にバタバタと死んでった。黄麻工場で働く子どもは七

歳ですでに家の長で、一家を支える働き手だった。でも『肺から糸くずを追いつために咳をしながら働く』なんて言い方があったくらいだから、いかにひどい環境だったか想像がつくでしょ。七歳から十八歳まで十二年間働き続けた体はもうボロボロ。そこで酒、強い酒ね」

タカハシが八つぁんと熊さんのほうを見た。

「八つぁんと熊さんも、心して聞いておくように」。ここで隠居が一言。タカハシ記者が笑いながら続けた。

「――イギリスの場合、ジンだけどね、何があっても、ジン。『一ペニーで極楽に、二ペニーで地獄行き』といって」

「きついねえ」と八つぁんが苦笑いをした。

「でもさあ、身内によって埋葬されればいいよ。この独り者は行き倒れだからな。仏の行き先がないんだよ」と熊さん。

山谷の日雇い労働者だって、日々死と隣り合わせだから葬式のことをちよつとは考えてるんじゃないか。そう誰でも思うのだが、違った。まるで考えてないのか、それとも考えないようにしてるのか。無法松は先のことなんてこれっぽっちも考えてなかった。酒呑んで太鼓叩いて、それと野鳥の会で貯金もなし。

8

ヒガシは夢を見た。なぜだか、北の国に薬草を採りに行かなければならなかった。のろのろと走る鈍行列車に乗った。窓景色は一面の雪だった。白兔が走るのが見えたような気がしたが、それは雪がただ舞い散っていただけかもしれない。どれくらい列車に乗っていたのかわからなかったが、ともかくさびしい駅に着いた。駅員が一人、出迎えてくれたと思ったが、降り立ってみるとそれは雪だるまだった。無人駅なのである。

薬草は山のてっぺん近くに生えているという。目ざすはその千メートルほどの山の上だ。バスの停留所はなかった。たぶんバスは通っていないのだろう。先に見える山には歩いていくしかない。ヒガシはゆっくりと歩き始めた。すこし行くと、だらだらとした坂となった。ここらあたりから山に登り始めるのだろう。

「あれ」。先ほどまでの雪道ではなく、地肌に見える坂道になっている。普通は、雪は山の上に行くほど深くなるはずなのに。「ところ変われば品変わるっていうが、なんかあべこべだな」。ヒガシは思い直したように、いくぶん力を込めて歩く速度を増し坂道を上る。三十分ほど歩いて行くと、勾配が急となって坂道から山道となった。ここからは、さらにギアチェンジをして登っていくことになった。息切れしながらの三十分が過ぎた頃だった。

「何をしにお前は来たのだ？　ここを神聖な山と知ってのことか？」

突然、目の前に巨人が現れ立ちはだかった。身の丈三メートルほど、顔は髭ぼうぼう、手には太い棍棒をもち、全身何やらのぼろをまとっている。角こそ生えていないが、まるで漫画などで見かける鬼そのものだ。

腹の底まで響くような野太い声に驚きこそしたが、その恰好を見て、ヒガシの体から緊張感が消えていった。

「この山にあると言われている薬草を採りにきたのです」。ヒガシはできるだけ落ち着き払った話し方で返答をした。

「だが、ここから上に行くには通行手形がいる」。巨人の口ぶりは、先ほどよりいくぶん柔らかくなったような気がした。続けて巨人が言った。

「通行手形を持っていないのなら、お前がいま大切にしているものを一つこちらによこせ」
「まさか命とか心なんて言うんじゃないですね」

「それでもいいぞ」

「二つとないもので、それはご免こうむりますよ。そうだ、これでどうです？」。ヒガシはリュックサックの中から一冊の本を取り出し、巨人のほうに頭上高く持ち上げた。

「ほう本ね。退屈しのぎにはそれも悪くない。で、どんな本だ」

『『イソップ寓話集』』といって……」

「なーんだ、イソップなら知ってるわい」

「紀元前六世紀のギリシャで奴隷がつくったといわれている由緒ある本なんですよ。いろんな人によって語り継がれてきた話を集めた本で、大人になってじっくり読み込むと新しい発見があるんです。だから、もう一度読んでみるのをすすめますね。それに知ってます？ 日本でも江戸時代に『伊曾保物語』という題名で翻訳されたんですよ」

「ふーん、そうかい。よし、わかった。それを渡せ。通行手形のかわりとしてやろう」

ということで、意外とあっさりと通行が認められたのだった。そうして再びヒガシは山を登り始めた。それから三日目——なんで三日もたったのかは夢なので不明なのだが、ともかく山のとっぺんにたどりつき、めでたく薬草を採集することができた。

「さて、戻るとするか」

そのときだった。「ドンドンツク、ドンドン」。太鼓の音が聞こえてきた。すぐ近くからだ。見れば太鼓を持った男と、八つあん、熊さん、それにタカハシ記者もいる。ということは、太鼓を持った男は無法松ということなのか。

タカハシが話し始めた。「無法松さんに頼んで、事件の原因を探すためにここに連れてきてもらったのよ」

変だな、無法松さんは死んだのでは、とヒガシは思った。

「八つあんと熊さんも一緒に来てもらってたね」

タカハシが八つあんと熊さんのほうを向いた。ところが、いつもはおしゃべりな八つあんは無言のままだ。無法松はただ太鼓を叩き続けている。「ドンドンツク、ドンドン」。ますます変だ。

「見てよ、これ。これが原因なのよ」と言っ、タカハシは白い粉の入ったビニールの小袋を見せた。

「白い粉？」。パケって言ったっけ、そのビニールの小袋は。というと、覚醒剤か？ ヒガ

シはため息をついた。

「そうよ、これで事件解決に一步近づいたわ。これから前祝いで乾杯よ」

「えっ？」

「知らないの？ 裏道にあるトンネルが泪橋の『世界』とつながってるんだから。それでここに『世界』が出店してるのよ」

えーっ、嘘だろう？ ヒガシは思わず目をこすったが、ここは異界だからそんなこともあるのか？

「でも、これから俺は家出少女を探さなければならぬから、急いで東京に帰らなければいけないんだ。だから失礼するよ」とまどいながらヒガシが言い訳をした。

「そう、しょうがないわね」と残念そうなタカハシ。

そうして、ヒガシは先を急ぐように山を下った。ところが三十分もしないうちにまた巨人が現れた。

「どうだ、薬草は手に入ったか？」

「苦労したけれど、何とか見つけたさ」。やや大きめのビニール袋に入れた薬草を巨人に見せた。周りを見渡せば、往きに巨人が現れたところと同じ場所だった。

「それはよかったが、それでは通行手形を渡してもらおう」

「なんだよ、この間、『イソップ寓話集』を渡しただろう」

「ああ、三回も読んだからもうそらで言えるくらいだ。ただ『アリとキリギリス』や『ウサギとカメ』、それと『北風と太陽』は前に読んだことがあるな。あと『田舎のネズミと町のネズミ』や『金の斧と銀の斧』『王様の耳はロバの耳』の話はどこかで聞いた記憶がある。いやケチをつけてるんじゃないぞ。なかなか面白い通行手形だった。だが、あれは往きの分だ。今度は帰りの分だ」

「もう何も持っていない」

「持っているだろう？」

「おい、命や心は駄目だぞ」。ヒガシはここで強く言い返した。

「わかっている。そこにあるじゃないか。さっき俺に見せたものさ」

「こ、これは、せっかく採集してきた薬草だ」

「薬草？ そいつが薬草か？ 白い粉じゃないのか？」。驚いたことに、巨人の顔が徐々にくずれていき邪悪なものに変わっていった。

ヒガシはビニール袋の中の薬草を見た。「なんだ、これは！」。それは、パケに入った覚醒剤に変わっていた。

「ふーっ」。ここでヒガシは長い夢からさめた。額には脂汗が滲んでいた。

「娘は非行少女なんです」。Tさんが唐突に言った。ヒガシはすこし面食らった。非行少女ねえ。そういえば、非行少女なんて言い方は最近、あまり聞かなくなったな。昔、『非行少女』って映画があったっけ。確か、日活の和泉雅子が主演していた。そんなことをちらっと

思ったためか、間があいた。Tさんは考えをめぐらしていると思ったのか、ヒガシが話し出すのを待っていた。

その娘の名はサチと言った。Tさんがつかえつつかえ話したことからわかったことは、だいたい次のようなことだった。

――娘のサチは高校一年生です。「ヤンキー」って言うんですかねえ。学校に行けば、頭の毛をリーゼントにして変な学生服を着た男の生徒と一緒にあって、自分は長すぎるスカートをはいて、いろいろと問題行動を起こしていたようです。窓ガラスを割ったり、先生に絡んで授業をつぶしたり。それが、この頃、学校に行かなくなって。前は、学校に行って非行少女をしてたんですがねえ。ときどき仲間から電話がかかってくると長いスカートの恰好で出かけてました。ええ、部屋からタバコが出てきました。小さいナイフを見つけたときはびっくりしました。仲間とたむろして何をやっているのか私にはよくわかりません。万引きとか、お金をゆすつてるとかしてなければいいんですが。あつ、仲間からゆすられる様子はなです。見かねて、父親が意見をしました。家にいるときは部屋にこもってましたから顔を合わせるの少ないんですが、たまに合ったときはガミガミ文句を言っていました。サチは露骨に嫌な顔をしてプイと背を向けて部屋にこもっちゃうんですけどね。それでどんな父親との折り合いが悪くなって……。

素行の悪い娘と、またも父親との関係が原因での家出だった。

「あのう、全然連絡がないんですが、変なことになってるなんてことは……」。おどおどしながらTさんがヒガシに聞いた。

「変なことって？」

「誘拐だとか……」

「それはないでしょう。誘拐なら逆に犯人から連絡が入るでしょうから。まあ、そうなら私のような探偵の出る幕ではありませんが」

「悪いヤクザにでもつかまって、変なことをさせられてるんでは……」

「水商売を強制的にさせられてるとかですか」。ヒガシは意識的に「売春」などの刺激的言葉を避けた。「状況をすべて把握していませんので、はっきりとは言えませんが、そこまで悪いケースじゃないような気がしますけれど」

「そうですか、それならいいんですが……」。Tさんの声はか細かった。

「とりあえず、友達関係の周辺を洗うことから始めてみます。それからまれに不良グループとつるんで親からお金をせびりとうるなんてこともありますので、そういう電話などがあったら私のほうに連絡をください」

「はい、くれぐれもよろしく願います」。Tさんはヒガシに向かって深々と頭を下げた。そんなに頭を下げられたことなど、いままで経験したことがなかったので、ヒガシは少々居心地が悪かった。

「えーと、この間も申しましたように、捜査の費用としては一日一万五千円プラス経費です。なかには、ぼったくり料金の探偵社もありますから気をつけてください」。なんか余計なこ

とを言ってしまったかなあ、とヒガシは思った。そして、「こちらこそ、よろしく願いします」と早口で言って、Tさんに頭を下げた。

娘の学校の問題行動グループにあたりをつけるのは簡単だった。リーゼントにダボダボのズボンをはいた生徒を見つければよかったからだ。もうちょっと太くて裾を締めれば日雇いの七分ズボンじゃないか。

ヒガシは学校から出てきたそんな恰好の一人を尾行した。しばらく行くと、彼はあるコンビニの中に入って何かを買い、そのコンビニの裏側に回った。すと思った通り、駐車場の横の狭い空き地に彼らのグループがたむろしていた。男が五人、女が二人だった。ここが彼らの溜まり場なのか。「ここなら遠くから見ればOKだな」とヒガシは思った。このまま動きがないのかと思った一時間ほどたったとき、三人がバラバラと帰って行った。それに付れて、四人が動き始めた。ヒガシはあとをつけた。四人は少し歩いていくと、ゲームセンターに入ってしまった。

「ゲームセンターが好きだな、他に行くところがないのか」。ヒガシは店の出入り口を調べ、彼らを見失わないように準備してから、じつと様子を探り始めた。その中で、まだ中学生と言ってもいいような小柄で気の弱そうな少年がいた。ヒガシは彼をターゲットにした。

次の日、学校の帰り道で周りに人のいないことを確認して話しかけた。だが、彼は「サチのことなんか知らない」と言うばかりだった。箝口令が出されて、知らないと言っているのだろうか。彼らは仲間意識が強い。だから、仲間についての情報など他者には話してくれない。警察などの強圧的な言いように屈して話すことはある。しかし、世間や警察などの権力に対しては反抗的なものだ。

しつこく強く問い続けたが、頑として口を割らない。なかなかいい根性をしてるじゃないか。ヒガシはすこしばかり感心した。しかし、顔を見ると明らかに知っていると言っている。ここで、ヒガシは方針を変えた。

「しょうがない。あんたたちのボスに聞いてみるよ」

「ボスなんていないよ」。彼は不服そうに言った。

「ボスじゃなくて、ほらリーダーの彼だよ。ゲームセンターにいた……」。ヒガシはかまをかけた。「彼から聞いたほうが君もいいようだし。そうだ、君から俺が近日中にサチさんの消息を聞きにいくと電話してくれてもいいよ」。それを否定しなかったことで、ヒガシは彼らがサチの消息を知っていることを確信した。そして、前日のゲームセンターにはリーダー格の少年がいたことも。

ヒガシはゲームセンターでの彼らの写真を撮り、リーダーらしき者を一人ピックアップアップしていた。次の日、ヒガシは学校に行き、サチの担任の先生にその写真を見せて名前を聞いた。「犯罪とかそういうことではないんですが、プライバシーにかかわることなので内密にしてください」

その足でゲームセンターへ向かった。暗くなってから、彼らがバラバラとゲームセンターから出てきた。

「腹が減ってこれで解散か。けっこう真面目じゃないか」。ヒガシはめざすりーダーのあとを追った。「X君、ちよつと」。暗がり、ヒガシが声をかけた。彼は一瞬驚いたようだった。

「ちよつと話があるんだ。別にあやしいもんじゃないし、警察でもないよ」

「なんでえ、サチのことか。そんなの知らねえよ」。彼は予想していたという感じで言葉を返した。

「消息を知ってるのはわかってるんだ。これ以上、知らぬ存ぜぬで通すとまずいことになるぞ」。ヒガシは威嚇的に言った。彼はすこし身構えた。

「よし、たほうがいい。俺は昔から格闘技をやっている。それにいいかい、俺が知り合いの警察官に連絡すれば、君は非常によくない立場となる」。ヒガシは、こんな脅かし方は好きではなかったが、しょうがないと自分に言い聞かせた。

「X君、脅かすつもりじゃなかったんだよ。私は親御さんから頼まれた探偵だ。お母さんは本当に心配してるんだ。そこらへんは君だってわかるだろう」

そのあと、二人は夜道をヒガシが買った缶コーヒを飲みながら歩いた。

「サチは先輩のところにいるんだよ。先輩は暴走族のリーダーでかっこいいんだ。サチはオヤジが大嫌いなんだって。もうオヤジの顔を見たくないとき」

「でもなあ、母親が心配してるから、とりあえず一回でも帰らせたらどうだ？ 私がその先輩のところに行って話したら何とかならないか」

暴走族の先輩は十九歳だという。ヒガシが「彼は酒は好きか？」と聞くと、「好きなものは単車と甘い物だ」という考えもなかった答えが返ってきた。「いまどきの若者は酒も呑まないのか」。ヒガシはその好物の菓子折りを持って二人のいるアパートに行った。

「あんた、探偵さん？ かっこいいじゃん。で、殺人事件なんか追っかけることもあるの？」。サチは素っ頓狂な声をだした。長いスカートではなく、普通のGパンをはいていたが、無理してぬったような紫の口紅をしていた。ひどくアンバランスだったが、それは少女に反抗する力を与える一つの武器なのかもしれない、とヒガシは思った。

「あのこれ、甘い物が好きと聞きましたので。単車のことはわからないので、これで勘弁してください」。ヒガシはその先輩に向かってさりげなく菓子折りを渡した。横目で見る彼は、まだあどけなさが残っている顔つきだった。ヘルメットを深くかぶり、単車をぶっ飛ばしているときはいったいどんな顔をしているんだろう。「どうでしょうか。サチさんにはそろそろ家に帰ってもらうとか……」

「まあ、俺はいいけどな」

「あんた、甘い物で買収されたの！」。かん高いサチの声だった。

「まあ、まあ、彼も心配して言ってくれたんだから。ここはいろいろ言い分もあるだろうけれども……お母さんはもう本当に心配してますから」

「帰らないわ」

「とにかく一度帰って、それからのことは……」

「なんなのよ」

「ちゃんと話し合うなり……」
「探偵さん、体格いいのに迫力ないわね。で、殺人事件はどうなのよ」
「えっ？」
「殺人事件なんか追っかけてるの？」
「昔、刑事でしたから。それにいまちょっと」
「いまも？　じゃ、私もその現場に行ける？」
「ちょっと、それは……」
「駄目？　駄目なら帰らないわ」
「……」

9

ヒガシが玄関の引き戸をガラガラと開けた。
「ご隠居、いらっしゃいますか？」
「よう、ヒガシさんかね、今日は一人かな」。ご隠居が障子の横から顔を出した。
「ええ、ちょっと話を聞いてもらいたくて」。ヒガシはそう言いながら戸を閉めた。「外はだいぶ温かくなってきましたよ。そろそろ梅も終わりですかね。しかし、鍵ぐらいかけたらどうですか？　いくらなんでも不用心ですよ」
「元警官のヒガシさんとしたら気になるかね。でも、盗まれる物なんてないし、火をつけられたってここは借家だし、まあ身一つセーフなら問題ないんだ」
「その身一つが安全ならいいんですが、何しろこの頃はとんでもないことが起こりますからね」
「それに、うちには用心棒が二人いるから」
「八つぁんと熊さんですか？」
「ところで話って何だい？」
「実は、変なというか、嫌な夢をみたんです。ふだんは夢なんてすぐ忘れちゃうんですがね、ちょっと引っかかりまして。正夢なのか逆夢なのか」
「ほう、ヒガシさんが夢占いねえ」
「夢の中には、タカハシ記者と八つぁん、熊さん、それに太鼓を叩く無法松さんまで出てくるんですが、ご隠居だけいませんでした」
「無法松さんもねえ。で、わしだけ仲間はずれかい」
「登場人物じゃないほうがいい判断ができるんじゃないかと。それと気にかかるのは……」
「何かね、それは？」
「白い粉です。まあ、覚醒剤や麻薬を表す隠語なんですけどね。その白い粉が入ったビンールの小袋をタカハシ記者が指して『これで事件解決に一步近づいた』なんて言うんですよ」
「なるほど、それが正夢ならすごいことだな。しかし、それってずいぶんと非科学的じゃない

いの。自供やカンに頼る昔かたぎの刑事を嫌ってるヒガシ探偵らしくない」

「その通りなんですがねえ」。ヒガシは照れ笑いを隠すように左目の上を掻いた。

「でも、カンは必要だよ」

「まあ、それで……実は暴力団のシノギについて改めて考えてみたんですよ。昔からのシノギの主流といえば、バクチや公営ギャンブルのノミ行為、それにみかじめ料、風俗関係……」

「みかじめ料っていうのは場所代？」

「ええ、縄張りの飲食店なんかのショバ代、用心棒代ですね。あと債権の取り立て、そして人夫出し、ご存知、ここ山谷なんかでの労働者の手配、ピンハネですね。ついこの間まで手配は違法でしたから、暴力団のシノギとしてはびったりでしたね。無法松さんが絡んでた原発などの被曝労働は典型的な『キツイ、汚い、危険』の3K労働ですから、ピンハネのうまみはさらに大きかったんじゃないかな」

「そうだろうねえ」とご隠居がうなずく。

「あともっとダーティーで裏の稼業といえるのがシャブと言われてる覚醒剤などの白い粉、麻薬の売買。これは人をボロボロにしてしまう代物なのでヤクザの組でもご法度にしてるところが多くて。とはいえ、いまだき彼らもシノギが厳しい。背に腹はかえられずと、黙認してるところも、これまた多いようです」

「麻薬が作りだす金は莫大だからなあ。昔の中国でのアヘンね。イギリスがぼろ儲けをしたし、満州では日本の関東軍がそれで軍資金をつくったんだな。そうそう、昭和の妖怪と言われた元首相も満州時代、これに絡んでたそうじゃないか」

「無法松さんは、初めは人違いでやられたんじゃないかと思われてましたよね。でも、金もとられずに襲撃されて、おまけに白手帳がなくなってる。それは身元確認のためと考えられるから、いまのところはヤクザ者とか誰とかは言えないけれど、やはり狙われたんじゃないか。少なくとも単純に間違われたんじゃない。まあ映画や小説風にいえば、闇の勢力と知らぬ間に遭遇してしまったため、それで邪魔者は殺せ、目撃者は消せ、みたいなことになって。あつ、これだとB級映画そのものですか」

「なるほど。でも、一概にB級の映画や小説と馬鹿にしないで、一つずつ可能性をあげていくのもいいかもしれない」

「でしょう？　そうすると、さっき列挙した暴力団のシノギの中で……まず、みかじめ料や風俗関係、債権取り立ての利権なんかはどう考えても彼との接点がないでしょ。すると、無法松さんが昔やってた原発反対の『野鳥の声』というグループの活動ね、そのときの、原発労働者の人夫出しとの対立、つまり日雇い労働者と手配・ピンハネの関係が一つ。もう一つは、例の『野鳥の会』山谷支部とか言っていたバードウォッチングや、太鼓を叩いたりでいろんなどころに彼は首を突っ込んでたでしょ。それで覚醒剤の取引現場なんかを偶然見ちゃったとか」

「うーん、いずれにしろカギは『野鳥』か？　ヒガシさん、この頃、わしも朝の散歩をしていても視線をつい上に向けちゃうんだな。そうして周りの木の枝葉を見たり、鳥の鳴き声に

聴き耳を立てたりしてるんだね。その前は、下を見て歩いていたような気がするんだが、これも無法松さんの野鳥の影響かね。知ってる鳥なんて、カラスや鳩それに雀ぐらいだったんだけど、このあたりでも意外といろんな野鳥が飛んでるのがわかったよ」

「無法松さん亡きあと、ご隠居が『野鳥の会』山谷支部を引き継いだらどうですか」

「『野鳥の会』ねえ。それはともかく、原因が覚醒剤なんかだったらやっかいだな？」

「大きな暴力団が絡んでる可能性だってあるし、われわれ素人が麻薬捜査官の真似事をするには危険が多すぎますよ。うーん、今度、昔の知り合いの麻薬取締官に話を訊きに行ってみましょうか」

「そこは頼みますよ。それと、この野鳥関係の二つじゃなくて、他の可能性も考え直してもいいんじゃないかな。例えば、熊さんや、無法松さんの呑み仲間にもう一回詳しく聞くのも無駄じゃないと思うんだよね。見落としてたり聞き逃したりしたことはないか」

「みんな酔っぱらいですからねえ。細かいことで忘れちゃってたかもしれませんし、それが大事なことだったというのにもよくあることで」

「二、三日前だったかな、ふっと思いついて出しましてね。ほら、関東大震災のとき、自警団が朝鮮人や社会主義者を殺して回ったじゃないですか。人間ってときに異常なことを平気でする。昔のアメリカでもその自警団みたくのが野宿してるホーボーをまるで狩りでもするように襲って、ひどいときは殺しちゃった。彼らはホーボーなんて人間のくずとしか思っていない。朝鮮人を危険分子としか見てない。だからリンチで殺した。アメリカの西部劇だな。少年たちが襲撃したって線はないみたいだけれど、そういった者たちがやった可能性も捨て切れないんじゃないか。だって、山谷の労働者はいつも差別的な目で見られてるから」

「オートバイで旅をする若いヒッピーがラストで撃たれて殺されちゃう映画がありましたね。えーと、『イージー・ライダー』」

「映画館に観に行ったんだけど、周りはわしより若い者ばかりだったな」

「ご隠居は若いですよ」。ヒガシはそう言ったあと、家出少女のサチと暴走族の少年のことを思い出していた。

「ピッピイー、ホーホケキョ、ケキョケキョ」。おや、ウグイスか。近くの公園を歩いていたヒガシは、その声をするほうを見上げた。だが、鳴き声の主を見つけようとしても、そこには枝葉に覆われた木々が数本あるだけだった。すでに三月の半ばで、だいぶ暖かくなってきた。「声はすれども姿は見えぬ、か。うまく姿を隠すもんだな。梅にウグイスというが、もう梅は終わって、桜が咲きそうだけれど」

ヒガシは何気なく今度は視線を下のほうに移してみた。地面には何羽もの鳩が群らがつている。「鳩にエサを与えないでください」という標識の警告もなんのその、エサをまいたのだろう、年寄りの男がエサが入っていた袋の口を逆さにしてパタパタとはたいている。鳩はチョコマカ、チョコマカ、そのエサを追って動き回る。人への警戒心などまるでなしだ。よく見ると、二本の足を交互に動かしてけっこう速い。馬でいうところの速歩である。

そこへカラス一羽が登場。エサをまいた者には予定外だったろうが、カラスだって腹が減っているのだ、そんなことにかまっていられない。最初は二本足をこれまた前後に動かしてエサを追っていたが、どうも鳩ほど素早くない。これでは埒が明かぬと考えたかどうかかわからないが、その二本足を一緒にピョンピョンと飛ぶようにして進み始めた。「キョンシーだな」。ヒガシは香港映画に出てくるオバケを思い出した。ところが、それがそんなに速くない。鳩の足の機動性にはかなわない。うーん、カラスもつらいなあ。どうせオレ（あるいはワタシ）は憎まれっ子世にはばかるんだから、とひねくれているのか。それともすでに達観しているのか。カラスには誰もエサをあげようとしなからなあ。

ヒガシはそんなことを考えていたが、おっと、こんなことをしてる場合じゃない、遅刻、遅刻と思い直して足を速めた。これから熊さんや呑み仲間が集まっている「野田屋」に行くところだった。「野田屋」は、酒屋兼立ち呑み屋でいろは会商店街の山谷寄りの入口近くにある。ここも泪橋の「世界」と同様、いつも労働者たちで溢れかえっている。熊さんの力も借りて、そして酒で滑らかになった舌に期待して、もう一度みんなから無法松についての話を聞き出そうというのだ。小さな情報、あるいは噂話など、言い忘れていたことを些細なことも含めて、すこしでも探り出せれば、とヒガシは思っていた。

「野田屋」に入って行くと、熊さん、赤シャツ、坊主頭、そしてあと二人ほどの面々がもうすでに一、二杯ひっかけているようだった。

「あっ、遅れてすいません」と言っただけでヒガシが腕時計を見ると、まだ集合時間の五分前だった。そして、ワイワイガヤガヤと一時間がたった。

「そういえば、無法松にここでおごってもらったことがあったな」と坊主頭の男が言った。「酒が入るとあいつ気前が良くなるからなあ。飯場から帰って来た時なんかけっこうみんなにおごっていたな。俺もあいつもアブレが続いてアオカン（野宿）してた時も、ポケットから銭を出して『もうこれしかねえや』なんて言っただけで買った缶チューハイを一本ももらたよ。下手くそな太鼓とぐでんぐでんに酔っ払ったとき以外はいい奴だったなあ」と赤シャツが続けた。

「そうそう、こういうことがあったな。『ちょっと臨時収入があったから、これで呑もうぜ』って、いきなりポケットから一万円札を取り出すんだよ。それから、『本当はもっとでかい大穴かと思ったけど、それがケタオチになっちゃったんだだけさ』と言うから、馬券でも取ったのかと思ったんだけどね。でも、ちょっと残念って感じじゃなくて、渋い顔してんのさ。馬券を取ったんなら、すこしくらいうれしそうにしろもいいのに。おごってもらうんだから、まあいいかって気にしなかったけれど、なんか変だったな」

「ちょっと待った。俺もその時にいたぞ。それで、無法松が言うには、拾ったものをヤクザ風の奴らに取られたって。一万円はその口止め料だったらしいぜ」。ここで、もう一人の日雇い仲間が話に割り込んだ。

「俺はそんな話、聞いてねえぞ」と坊主頭。

「お前は、その時にはもう酔ってへろへろだったんだよ」

ヒガシは、それを聞いて一人でうなずいた。ヤクザ風の男たちに取られたそのブツが覚醒剤などの白い粉という可能性は十分にあると。というと、あの夢も……。

ヒガシは白い粉をめぐる「ある噂話」を思い出した。しばらく考えていたが、麻薬取締官のあいずに話を訊きに行ってみようと決めた。

ヒガシは警官時代に格闘技としての柔道にあきたらず、一時、少林寺拳法を習いに通っていた。そこである麻薬取締官と親しくなった。麻薬取締官、通称マトリは警察官ではない。厚生労働省の、彼の場合は関東信越厚生局の麻薬取締部に所属する。とはいえ、薬物の取り締まりをするので格闘技が必須となる。彼らの逮捕術は少林寺拳法を基礎としていた。その麻薬取締官ヤマダはいま横浜分室にいるはずだ。大きな麻薬密輸が行われる横浜港がある横浜に分室が設置されているのだ。

さらに、ヒガシはタカハシ記者に電話して、その噂話を聞いたことがある地獄耳の同僚がいないか、いたら話をきいてほしいと頼み込んだ。ただし、夢の中の「これで事件解決に一歩近づいたわ」というタカハシの言葉については話さなかった。

「昔から噂話があるだろう。現役の警官が警察署の証拠品倉庫から覚醒剤を盗んで、ヤクザに横流しをしたってこと」

「昔からあるねえ、そんな噂は」。麻薬取締官ヤマダはヒガシのその言葉を受け流した。

「つい最近もそんなことがあったって噂を聞いたんだけど。一年くらい前かな」

「それは知らないなあ。あつ、知ってても言えないけれどねえ」

「まあ、そうなんだけど。なんでも、ひらの巡査から警部補までたき上げて這い上がって来たんだけど、キャリア組は最初から警部補だから、それを横目で見ていて馬鹿らしくなった、とか。まあ、そこらへんは尾ひれ背ひれなんだろうけれど」

「キャリアとノンキャリアか。ヒガシさんはどうだったの？」

「俺は最初から出世なんか目ざしてなかったから。そういうんじゃないくて、組織が嫌になっちゃった」

「まだ組織にいる俺には耳が痛いね。まあ、公安の傲慢なところに反発する警察官もいるしね」

「アメリカ映画ではFBIに反発する地元警察官なんて図式もあるね」

「FBIはえげつないからね。昔、黒人の反政府組織をつぶそうとして、その地域に麻薬をばらまいたそうじゃないか。ところで、探偵さんが何でそんなことを探ってるんだい？ 場合によっちゃ、やばいだろう？」

「いや、こっちは家出少女とかそんなところをやってるんだ」

「じゃあ、どうして？」

「俺はいま山谷に住んでるんだよ。そこで知り合いの友達の日雇いが路上強盗に襲われたんだ。相当殴られて意識もなかったそうだ。山谷やここの寿町でも、酔った労働者をいきな

り殴りつけて金を奪う手合がいるんだな。ところが、不思議なことに金を取らずにただ痛めつけるだけだね。初めは人違いじゃないかと思われたけれど、白手帳がなくなってるんだなで、それは身元確認のためだろうってなってね。だけど、山谷では日雇い労働者が強盗にあっても、警察はよう動かんのよ。だから、俺がすこし調べてんだ。まあ、ボランティアなんだけれど。彼は昔、反原発の運動をしたから、原発労働者の手配のヤクザと対立してたらしいんだ。あと覚醒剤の取引現場なんかを偶然見ちゃった可能性もあって。まあ、どういうことが原因でやられたのか、いまそれを探っているんだ。その無法松さんはこの間、死んでしまったけど、警察はまともな捜査をしないし、人一人の命に対して無視、無関心なんだよ。日雇いだって一寸の虫にも五分の魂だ。このままじゃ、浮かばれないよ。それであんたにちょっとアドバイスでもしてもらえたらと思ってね」

麻薬取締官は黙ってうなずいていた。

その数日後、麻薬取締官ヤマダからの留守番電話が入っていた。

「この間の話だけだな。火のないところに煙は立たぬっていうけど、この件に関しては火も煙もなかったよ。事実だとしたら噂ぐらいは流れるはずだが、この一、二年そんな噂はないようだ。百パーセントないって言いきれないが、まあテレビの世界の話だな。そんなところだ。ということで、今度、一杯やろうや」。そこで電話は切れた。だが、もう一件、留守番電話が入っていた。タカハシ記者からだった。

「ヒガシさん、同僚に聞いたけれど、そんな話は最近、聞かないそうよ。ただちょっと興味のある記事があったのでコピーして郵便で送ります。詳しいことはあったときに」

白い粉の線はこれで可能性が薄くなったか。まあ、夢だったからなあ、とヒガシはため息をついた。

次の日、タカハシからの郵便が届いた。手紙には、「他社の三面記事なんだけど……」とあった。ヒガシはその新聞のコピーを見た。

「拳銃が山中に遺棄、暴力団同士の抗争で使われたものか」

記事を読んだあと、ヒガシは考えた。対立する暴力団の幹部を狙撃した拳銃を山の中に捨てる？ 足のつく拳銃をそんなところに簡単に捨てるのか？ いや、警察にマークされている暴力団も相当困って、案外いい加減に捨てたのかも？

しかし、俺は白い粉にこだわりすぎたかもしれない。麻薬取締官ヤマダが先日言ったことがよみがえってきた。

「覚醒剤の取引場所は繁華街の雑踏が多いんだな。人ごみに紛れて逃げやすいから。でも、でかい取引はホテルなんかでやるんだ」

なるほど、大きな取引の現場はホテルか、そいつは無法松さんとは無縁だな。

無法松事件は、意外と単純な動機なのかもしれない。

「ヴォン、ヴォン、ヴォン」。外からオートバイのエンジン音が聞こえてきた。それはどうやらご隠居の家の前で止まったようだ。

「サンキュー、帰りは電車で帰るから。ヘルメット返すわ」という若い女の声がした。「ヒガシさん、ここがあんたたちのアジト？」

「人の家なので静かにしてよ」。ヒガシ探偵の声だった。ガラガラと引き戸が開く音がした。「みなさん、遅れてすみません。ご隠居、この間、電話で話した子を連れてきました。じゃあ、サチくん、上がって」

今日のサチは長いスカートをはいていなかった。そして紫色の口紅もしていない。しかしそのかわりに、髪の毛を頭上で爆発させたようなカーリーヘアをしていた。

驚いたようなタカハシ記者。それに、八つぁんと熊さんは突然の少女の登場で面食らっている。

「ちょっと説明します。この間この会を欠席したのは探偵稼業の家出人搜索のためです。それで、家出した子を何とか見つけたんですが……えーと、この子です。家に帰らないってゴネてたんですが、探偵の仕事に変に興味をもって。テレビの見過ぎですかね」

「テレビじゃなくて映画よ」。サチの口ぶりは不服そうだった。

「ああ、映画ね。この『無法松君事件を糾明する会』に興味あるから連れていけ、連れて行ってくれたら家に帰ると約束したんで、ご隠居に無理を言って連れてきてしまった次第です。プロの探偵としては失格ですかね。どうもすいません」とヒガシが恐縮する。

「まあ、今日のゲストみたいなものだ」とご隠居。

「その家出娘の少女、名前は何ていうんだい？」

「八つぁん、そんな言い方はよくないわ」とタカハシ。

「だって、家出娘だろう？　じゃなんて言えばいいんだ」

そこでサチが答えた。「サチといいます。よろしく」と意外にもいい話し方だった。

「じゃあ、サチさんね。サッチャンもいいかも」

「そんな歌があったなあ、『サッチャンはね／サチコっていうんだ／ほんととね／だけど／ちっちゃいから／じぶんのこと／サッチャンとよぶんだよ／おかしいな／サッチャン』……」。八つぁんらしくもない声だった。恥ずかしくなったのかちよつと照れている。

「おとなしく聞いているんだぞ、サチくん」とヒガシ。

「サチでいいと言ってるじゃん」とサチが口を尖らせた。

「あの一、さっきオートバイの音がしたけれど、あれに乗ってきたの？」。ここで熊さん。

「そうよ」

「サチくんのボーフレンドが乗ってきてくれたんだ」とヒガシ。

「ボーフレンドじゃない。ダチよ。暴走族なんだけど」

「ふーん、暴走族ねえ」とご隠居の驚いたような感心したような声。

「オートバイはいいなあ、俺も金さえあればオートバイを乗り回したかったよ。あの音がい

いもんなあ」。微妙な雰囲気の中、熊さんが恨めしそうに言った。

「熊さんがオートバイを乗り回したかったなんて初めて知ったよ」

「ご隠居は昔、日本全国を放浪しててね。映画の『イージー・ライダー』だって観に行ってるんだよ」。ヒガシがサチに向かって言った。

「しかし、一番若いのに彼氏がいるのか。スミにおけねえな。で……」

「八つあん、そこまでだ。これ以上お前がしゃべると下品になるからな」とご隠居が手で制した。八つあんは不満そうに頬を膨らませたが、しぶしぶそれに従った。

「会議に入る前にちょっといいですか、いままでのことをすこし整理しましたので……」。ヒガシ探偵がみんなを見回しながら話し始めた。

「無法松さんが何で襲撃されたのか、この会で話し合ってきました。残念ながら、まだ原因がこれだとはつきり言えないのですが、それをもう一度みんなで確認しましょう。第一は、かつて彼が関係していた反原発の運動で対峙したヤクザ組関係の人物出しとのゴタゴタですね。これは昔のことなので原因としての可能性は低いかもしれない。二番目は、組同士の対立、いざこざがあつて巻き込まれてやられた。彼がヤクザの下っ端と間違われたんじゃないかという説。日雇いの仲間は、最初これじゃないかという声が多いようでしたが、調べていくうちに不自然じゃないか、と。三つめは、彼がバードウオッチングをしているときに拾った包みを、ヤクザ風の男に一万円と引き換えに奪われたそうで、これは何か裏の取引のブツだったんじゃないのか。ちなみに、無法松さんが言うには札束じゃなかったそうです。それで、私のカンもあつて白い粉、俗にシャブって言われてる覚醒剤などの麻薬が入った包みじゃないかと思ひまして、昔の知り合いの麻薬取締官に聞いたところ、普通、麻薬の大きな取引はそんな山の中ではない、と言われました。それで、この白い粉の線も立ち消えになつてきてます。これとは別に、タカハシ記者が山中に捨てられた拳銃についての記事を送つてくれました。これは組同士の抗争で使われたもののようで、足がつく使用済み拳銃なので処分されたんじゃないかという記事でした。今回の件と関係はないかもしれませんが、密輸なんかじゃなくて、処分したいものを捨てたつてもあるのか、というところで報告しておきます。もう一つは、シンプルです。酔ってフラフラしている無法松さんをモガキが金を奪おうとして襲ったが、腕つぶしの強い彼の反撃にあい、驚いた二人組がより暴力的になつたで、金を取ろうとしたが、ほとんど持つてなかったの、なぜか腹いせに白手帳を奪つて逃げたという。まあ、こんなところですかね」

「いろいろ考えたが、やつぱり四番目のやつが妥当かな」と八つあんがしたり顔で言った。

「俺はそうは思わないね。絶対、ヤクザに奪い返された謎の包みが絡んでいるよ。麻薬の線とか、拳銃とか、怪しいんじゃないか」と熊さんが横から口を挟んだ。

「お前はテレビを見すぎだよ。意外と事実は単純なんだぞ」

「しかし、どちらの説も直感の域を出てないってわけですね、ヒガシ探偵？」とご隠居。「残念ながらそうです」

「気になるんだけど、テレビや漫画では、事件が一つ起こると必ず連続殺人事件が起こるよな」。思い直したように八つぁんが言った。

「漫画？　八つぁんは本を読まんからな。漫画じゃなくて、探偵小説だろう」

「だって、探偵小説なんて字が多すぎますよ、ご隠居。やっぱり漫画だよ。ねえ、サッチャー」と八つぁんは助けを求めるようにサチのほうを見た。

「そうね、小説を読むって確かにきついわ」

「ねっ、もう小説じゃなくて、本と言えば漫画なんだから。で、言いたかったことはそんなことじゃなくて、えーと、無法松事件だけじゃなくて、次の事件が起こってもおかしくないだろう。でもこれまで何も起こってないということなんだよ」

「うーん、そう言われてみればそうだな。無法松事件のあと妙におとなしいか」とヒガシが同調した。

「しかし、人が一人、事件で亡くなるってことは大変なんだぞ、八つぁん。そう簡単に連続して起こっちゃ困るよ」

「そりゃあ、起こっちゃ困るけどさあ。事實は小説よりも奇なりって言うじゃん」

「八つぁんはまるで事件が起こってほしいって感じだね。さっきは事實は簡単とか言ってたくせに」。ここで熊さんが突っこみを入れた。

「そうじゃねえけどよ。犯人はどんどん俺らの行動に追い詰められていって、ついには牙をむいて俺たちに襲い掛かるんじゃないか。だから、そこらへんの予防対策を考えておかなくちやいけないと。まあこういうことよ」と八つぁんが胸を張った。

「まあ、八つぁんの提案も一理あるな」とご隠居。

「で、犯人たちが俺らを襲うとすると誰がやられちゃうのかな。全員いっぺんに殺すわけにはいかねえし。テレビや、えーと、小説でも漫画でもいいけれど、そこらによれば、どこか影が薄いのか、根性の悪い奴が最初にやられちゃうんだな。主役はやられねえし、性格のいい者もやられねえ。主役はというと、ヒガシ探偵か、それに性格がいいというとかハシさんかねえ。影が薄いとなると、これは熊だから、第二の殺人の犠牲者は決まりだな」

「俺は、影が薄いのかよう。今回の無法松の件に関してはがんばったじゃないか。それに、これから俺はサチさんに頼んでオートバイに乗せてもらうんだから」と熊さんは不満顔。

「ええーっ」とびっくり顔のサチ。

「ほら、サチさんが驚いてるじゃないか。それに、中年の暴走族なんて聞いたことがない」とご隠居。

「でも、けっこうかっこいいかもね」とサチ。

「それはともかく、第三の犠牲者は、根性の悪いことにかけては右に出るものがない、八つぁん、お前だな」

「ちっ、ちっ、違うんだなあ。憎まれっ子世にはばかるって言うじゃないですか。ご隠居に決まっていますよ。第一、そうじゃなかったら世の中、年寄りだらけになっちゃうじゃないですか」

「いまの年寄りをないがしろにする言葉は聞き捨てならんぞ。時代が時代なら切り捨て御免だぞ」

「私も意見を言っている？」。ここでサチが了解を得るようにヒガシのほうを見た。ヒガシが話そうとするより前に「いいじゃないの」というタカハシ記者の声が聞こえた。

「どうしてモガキの犯人を追わないのよ。警察が二人を逮捕してれば、事件の真相はとつくとわかってるはずよ。そのモガキを探さなくちゃ」。サチが声を高くした。

「この警察はね、日雇い労働者が一人や二人襲われたくらいでは、なかなか動かないし、動いてもまともな捜査なんかしないのさ。どうせ酔っぱらって道で寝てたんだから、金目当てのモガキの餌食にされても自業自得だ、こっちは忙しいんだからな、と警察はうそぶくだけ。池谷荘の組合のオカさんが話してただけで、警察は日頃からこう考えてるんだって。『そんなチンピラ一人捕まえるより、いつ暴れだすかわからん日雇いを警戒するほうがよっぽど大事だし、もっと重要なのは、その日雇い労働者を扇動して暴動をそそのかす過激な組合をつぶすことだ』とね」とヒガシが説明する。

「でも、サチさんの意見は正しいわ」とタカハシ記者が首を縦に振った。

「確かにそうなんだけど、この会を結成した第一の目的は、無法松さんがどんな理由で襲われ、それで死ぬことになってしまったのか、それを見つけることなんだよね。何で殺されたのかかわからないっていうのはすぐ無念なことじゃないか。それが明らかになって、その結果、犯人を見つけることができる、もちろんいいんだけど。でも、いまサチくんが言ったように、犯人を見つければその理由もわかるってことも事実なんだけど」と再びヒガシが説明した。

「熊さん、無法松さんを襲ったモガキ二人組のその後の消息はまるでつかめないのかね」とご隠居が尋ねた。

「それが事件の現場を目撃したヤツもいい加減にしか覚えてねえみたいで」

「もう一度きっちり取材をしたほうがいいわね」とタカハシ記者。

「モガキっていうのは、タチの悪いヤクザのうしろについてまわっていることがあるからなかなか難しい。こっちも用心して探らなけりゃいけないし」とヒガシ。

「でも、犯人のモガキ二人組だって馬鹿じゃねえだろう。無法松の件があるから当分、山谷に現れるのはやばくてできないんじゃないのか。見つかったらみんなに袋叩きにされかねないもんな」と八つあんが口を挟んだ。

「そうなんだけど、あいつらだって、俺たちとちよぼちよぼで金の持ち合わせなんかそんなにねえだろうし、ヤクザの組の者だとしてもどうせ下っ端だろう。どっかでシノギをしなけりゃならないと思うよ。場所を変えて、例えば横浜の寿町でシノギをしようにも、土地勘も何もないだろうから簡単にはいかねえよ」

「そうよなあ、モガキ二人組もいまじゃ、かなり切羽詰まっているかもしれねえな。ということは、地道にどっかで日雇いなんかやってたりして」と八つあん。

「なるほど、意外や意外、そういうこともあるかもな。八つあん、熊さん、仕事に行ったと

きには、休みに競馬新聞ばかり読んでないで、あたりに気をつけるんだぞ」とご隠居。

「ちえっ、わかってますよ。でもねえ、やっぱりモガキなんかやってる奴らだから真面目な仕事なんかやってるかね」

「ヤクザの汚い仕事の下働きとか？」とタカハシ記者。

「そうだねえ、シャブを売ってたり、暴力でもって高利貸の借金を取り立てたりとか」と熊さんが答えた。

「熊、とにかく仲間にも呼び掛けて、これからはそこらへんに目を光らせるってことだな」
「八つあんもね。目だけじゃなくて、耳もだよ」

11

もう春である。公園の中では、ところどころでいまを盛りと満開の桜が咲き誇っている。そこに、人工的な感じの真っ赤な色の花がびっしり貼りついたような樹が見える。まるでクリスマスツリーを細長く垂直に伸ばしたような樹と花だ。その隣にも同じ小さな樹が対のようにあるが、こちらは白い花に包まれている。この紅白の花を付ける樹の名は照手桃という。梅はすでに散り、周りの桜に負けじと自己を主張するこの花のことなぞ我関せず、いま熊さんがそばを通り過ぎていく。

「ご隠居、いますか？」。熊さんが引き戸をガラガラ開けて、中に入ってくる。「おー、寒い。花冷えていうんですかねえ。暖かったり寒かったりのこういう気候がいちばん体に悪いんで、ご隠居、風邪には気をつけてくださいよ」

「熊さんかね。今日は一人かね？」

「ええ、今月の家賃を持ってきました」

「熊さんは相変わらず律儀だね。そこところは、八つあんも見習ってほしいよ」

「八つあんはいま十日契約の出張に行ってますよ。『だいぶ懐が寂しくなっちゃったからな、軍資金がなけりゃあ探偵もできねえ』なんて言って」

「探偵じゃなくて、どうせ呑み代の軍資金なんだろう？」

「そうでしょうねえ。じゃあ、これ」と言って、熊さんが現金のまま家賃をご隠居に手渡した。

「昼だから酒は出せないけれど、まあ、お茶でも飲んでいきなよ。ところで、事件についてだが、なんか進展はないのかね」

「あー、事件と直接には関係がないことなんですがね。この前、世界で呑んでたんですよ。そうしたら、俺の話を聞いてた年配の先輩が昔のことを話してくれました」

——もうずいぶん前になるかな。ある酒場で呑んでた労働者が些細なことでその店員と言い争いになって、それが喧嘩になっちゃった。他の店員も加勢してきて、酔った労働者を店の外に引きずり出してボコボコにしちゃったんだな。そこに、マンモス交番のポリが出てきたんだよ。ところが、暴力をふるった店員じゃなくて、やられた労働者をマンモス交番

に引っ張っていったんだ。見ていたみんなが怒ってねえ。『なんで、やった奴じゃなくて、やられた労働者を連行するんだよ』って。それで、暴動が起こったんだよ。まあ、警察がヤクザなんか甘いのはずっと昔からのことだけど、この場合は暴力店員ね。

そこまで話して、熊さんがお茶の湯飲みを口に持っていた。「ふーっ」。どこか浮かない顔である。

「なんだい。熊さん、ちょっと元気がないじゃないか」

「いやねえ、二日前に、『野田屋』で赤シャツと坊主頭が喧嘩しまして」

「へー、二人はいつもつるんでいて仲がよかったんじゃないのかい？」

「そうなんですよ。仕事もだいたい一緒だし、ドヤも同じところ、アブレて金がない時は一緒にアオカンしてましたから。それが殴り合いになって、俺がそこで止めに入っただんですがねえ。もうお互いにもすごい剣幕で『お前の顔も見たくない』となって」

「相当酔ってたんじゃないのか？」

「そうなんですけど、いつも酔ってるんで。酒のせいもあるかもしれないけれど、もう大喧嘩ですから。俺が中に入ってたけりゃ、まづいとこだったんですよ」

「ふーん、なんか大きな理由があったんだろなあ」

「そうなんですけど、俺が止めに入ったら『うるせい、お前みたいな中途半端な日雇いに俺たちの気持ちがわかるか』ってこっちをにらむんですよ。こっちだって、喧嘩をやめさせようとしているのに『中途半端』なんて言われたら面白くないし、勝手にしろって気になったんですけれど、そうもいかないので必死に止めました」

「理由はなんだったんだい？」

「それがよくわからないですよ。わけなんか聞いたらこっちに突っかかってきそうだったし」

「ふーん、熊さんも大変だったんだな。昔、わしが放浪してるときにやっぱりそんなことがあったよ。寒さが身に染みるし、金がないので儉約して一日一食で腹がすかしてまいったこともあったけど、それよりつらかったことがあるなあ。こっちが何気なく言った一言で、相手が突然それこそ瞬間湯沸かし器みたいにすごい顔つきになって怒り出したんだな。こっちは何がなんだかわからない。だから謝りようがないから黙ってたらいきなりぶん殴られた。いまから思えば、相手にとって触れてはならないことに触れちゃったんだな」

「そうですか、ご隠居もそんな経験があるんですか。やっぱりだてに歳をとってませんね」

「年寄りはいろんなことを経験しているんだが、ただ、それをどんどん忘れちゃうという特技もあわせ持ってる」

「なるほど。で、俺に対して『中途半端な日雇い』って言ったことだけど、あいつらはやっぱり一人ですつとやってきていて。俺とか八つあんなんかは、ご隠居に運よく出会って、古くて狭いとはいえ、あつ、すいません、アパート住まいだし、アオカンの心配もない。それに、ご隠居のところではメシ食って、酒呑んで、彼らにしてみれば恵まれてる中途半端な山谷の日雇いなんだなあ、と思ったりしました」

「……熊さん、どうだい。一本つけるから呑まんかい？」

なぜか、熊さんとサチの二人が山谷の近くの小さな中華料理店で相対している。

「サチさん、何でも好きなものを注文して。ここは餃子がうまいし、量もあるよ。あと、五目あんかけもうまいよ」

「じゃあ、五目あんかけご飯と餃子！　で、なんかあるんでしょ」。サチが熊さんを正面から見つめた。熊さんはその視線を受けてすこし照れ笑いをした。

「えへへへ、わかった？」

「そりゃ、わかるわよ。ご馳走してくれるんだから」

「すいませーん、五目あんかけご飯と餃子、あとビール、コップは一つね」と熊さんが大きな声で注文をした。そして真面目な顔で続けた。「あのさあ、免許とったらオートバイを買ってみようかなと思ってんだ。二五〇ccくらいののを。どんなのがいいか、サチさんの友だちに訊いてもらえないかな。オートバイのプロみたいなんでしょ、彼は」

「訊いてもいいけどさ、中古だつて安くないよ」

「すこしくらいならお金もあるんだ。いまけっこう仕事に行ってるから」

「それだけじゃなくて、ヘルメットなんかもいるよ」

「わかってるさあ、革ジャンも古着屋で買おうかな。ズボンはどんなのがいいかな」

「ズボン？　日雇いの人が作業するときはいてるのがあるじゃない。ほら、ぶかぶかで裾が絞ってあるの」

「ああ、七分ね。でもあれじゃ、ダサくない？」

「案外、カッコいいよ」

「へー、そうかねえ」

「でも、熊さん。二輪の免許はまだだよね」

「四輪は持つてるよ。昔、仕事で必要だったから。それで、これから教習所に行こうかと思ってるんだ」

「でもさあ、あいつもきつと言うよ。よしたほうがいいって」

「あいつが？　あれ、この間はダチって言ってたんじゃないの。ダチからあいつに格上げしたのか？　ふーん」

「何よ、同じことじゃん」

「違うような気がするけどなあ。まあ、いいか。で、そのあいつはなぜやめたほうがいいって言うんだい」

「やっぱり、二輪は危険なもの。熊さんは若くないからその危険性は倍だよ。それに、仕事じゃなくて趣味みたいなんだからお金もかかるし」

「それはわかるけど。不良少女をしてたくせに、けっこうまともなこと言うねえ」

「本当のことだもん」

「この間、ご隠居のところで『イージー・ライダー』って古い映画を観たんだ。ビデオを借

りてきて。二人のヒッピーがオートバイで旅に出るんだよ。そのタンクにはコカインの密売でたんまり稼いだ金が入ってる。でも、最後はヒッピーを毛嫌いする土地の者に殺されちゃうんだな。俺にはよくわからないところもあったけど、何ととってもヒッピーの一人が乗ってるオートバイがすごいんだ。ご隠居の受け売りなんだけど、チョッパって言うんだそう。ハンドルが高い位置に付いていて、その反対にシートが低い。それで当然、座る位置が低く、手の位置が高くなって、かっこいいんだなあ。しかも排気量が一二〇〇ccのハーレーダビッドソンだって」

「ふーん、『イージー・ライダー』を観て、二輪に乗りたくなったんだ。でも、稼いだお金を二輪につき込んでやって大丈夫？ わたしはまだ働いたことないからわからないんだけど」

「大丈夫、いま仕事をしてるし、ない日はアブレ手当をもらえるから」
「アブレ？」

「日雇いの失業保険みたいなもんだよ。二か月の半分くらい働けば、一日六二〇〇円を三日間もらえるんだ」

「えっ、六二〇〇円を十三日？」

「仕事にありつければね。実際にはそうもいかないんだけどね」

「あのさあ、日雇いの仕事って女にもできるの？ わたし、もう学校を辞めちゃうかと思ってるんだ。家を出て、アパートを借りて、一人で生きていこうかって。でも、一人だったら働かなくちゃならないでしょ」

「まあ、そうだなあ。しかし若いサチさんが日雇いねえ。できないことはないと思うけど。

安くてよければ軽い仕事もあるし。でも、女だと何かと厳しいかも。それに、いまはまあ仕事があるからいいけれど不景気になったらいっぱんに仕事がなくなるからなあ」

「そう」。すこしばかり意気消沈した様子の子のサチ。

「日雇いのいいところは、日銭が入ってくることなんだ。だから貧乏で貯金がなくても、現金仕事をすれば、とりあえず食っていける。でもねえ、よく言うんだけど、『土方殺すにや刃物は要らぬ。雨の三日も降ればいい』ってね。雨が降るとアブレちゃう。あと、年末年始なんかも仕事がない。そうすると、日銭で食っていくことが逆に弱みになっちゃう。ドヤに泊まれなくなつて野宿するしかない。体にいいわけないよ。冬だけじゃなくて梅雨のときも凍死する者があるんだよ」

「熊さんや八つあんを見たら気楽でいいな、親の顔を見なくても生きていけるんだって思ったけど、けっこう厳しいんだ」

「いやー、女の人はもつと厳しいんじゃないの。子ども抱えてキャバレーなんかで働いてがんばってる人もいるけどねえ。あつ、これは池谷荘の組合のオカさんが言ってたことだけど」
「わたし、がんばるって好きじゃないけど、すこし考えてみようかな」

※アブレ手当Ⅱ「日雇労働求職者給付金」のこと。日雇労働者を雇用する事業者は日雇雇用保険印紙を日雇労働被保険者手帳（白手帳）に貼付しなければならない。現在は、一級

印紙（賃金が一万一三〇〇円以上、二級印紙（同八二〇〇円～一万一三〇〇円未満）、三級（同八二〇〇円未満）がある。給付を受けるには前二か月間で二六枚以上の印紙貼付が必要で、ひと月に一三～一七日間それぞれ一級七五〇〇円、二級六二〇〇円、三級四一〇〇円を受け取ることができる。一九九四年九月に十年ぶりに改訂されたが、以降三十年たった現在まで改訂はない。なお、ここで熊さんが受け取っていた一級のアブレ手当は六二〇〇円で、改訂以前の金額である。ただ、現実には問題を抱えている。一つには、職安の窓口が白手帳を作らせないようにしていることだ。労働者が白手帳を作ろうとしても、「日雇いは不安定だから常雇用の仕事を探しなさい」などと言って、門前払いのような対応をすることも多く、さらに、不正受給があるといって不正と関係のない多くの日雇い労働者に対する締め付けを強めている。実際、白手帳取得者は激減している。もう一つは、事業者は印紙を貼付する義務があるのに、印紙を貼っている会社は少なく、違法な状態が野放しになっていることだ。